

【エッセイ部門・大谷文芸賞】

選択と生きる私達

慶應義塾湘南藤沢高等部 第1学年 佐野 美咲

かつての賢人たちは言った。

「毎日を人生最後の日であるかのように生きていれば、いつか必ずその通りになる。」

と。私はこの言葉が苦手だ。

もし今日が人生最後の日なら、私はなにをしたいのだろう。授業の復習なんてしないで、大好きなあの映画を観たい。単語帳なんて開かずに、友達にたくさん感謝を伝えたい。おばあちゃんに会って、おばあちゃんのおいしいごはんを食べたい。翌日の早起きの心配なんてしないで、美しい星空の下で過ごしたい。今日が本当に人生最後の日であるなら、そんな過ごし方でいいだろう。しかし、最後の日のつもりで毎日そんな過ごし方をしているのは、明日の私が、将来の私が、困るのではないか。翌日テストがあるのに「人生最後の日かも」と意識をしたら、私は現実から逃げてしまう。かつての賢人たちの言葉は、行動しないための言い訳を私に作ってしまうのだ。だから、「もし今日が人生最後の日だとしたら」という自問はしないようにしている。

まだまだ若い私だが、印象に残っている決断が二つある。

一つは中学受験の頃のことだ。塾に入ったのは新5年生になる少し手前。周りに比べたら遅いスタートだった。志望校はすぐに決まった。しかし、そのころ私はフィギュアスケートを習っていた。5年生になっても、大好きなスケートからは離れられなかった。週3の塾に通いながらも試合に出場していて、周りの成績が上がる中、私だけが置いてきぼりな気がしてならなかった。新6年を迎える前。受験に専念するのか、スケートで新しいクラスに入るのか。泣きながら結論を出したあの夜を、私は決して忘れない。父と母は、「好きな方を選びなさい。」と言ってくれていた。文化祭で輝いていた高校生の方たちと、幼いころ見に行った試合で輝いていた選手たち、そしてスケート靴からひらひらと儂げに舞い散る雪の粉たちの様子が、頭の中でぐるぐると回った。

決断をした私は、全力で受験勉強に打ち込んだ。失敗するわけには行かなかった。あの時の私は、過去の私からの期待を背負っていたからだ。幸運なことに、私は憧れの中学校に入学することができた。受験番号一八〇。掲示物でその文字を認識できた時は、驚きと、幸せと、安心でいっぱいだった。

しかし、もし人生最後の日があったら、私は勉強ではなくスケートをしただろうとも思う。それでも、将来の私を思っただけの過去の決断に後悔はない。

一方で、後先のことよりも、わくわくする方に飛び込んだ決断もある。高校でダンス部に入ったことだ。入学したての頃は、高校生は忙しいだろうし、部活動にはあまり力を入れない方が得策だろうと考えていた。「時間を大切に」という言葉は、「将来のためになりそう」

そんな行動が正解だと私に思わせていた。そんな中、軽い気持ちで行った仮入部。真剣に部活に打ち込む先輩方のかっこよさや、体を動かす楽しさに心が踊った。私は悩んだ。厳しいのは分かっていたから。けれど、自分が心躍る選択をしたかった。

ダンス部に入った私は、今とても幸せだ。朝起きても首や肩が痛い。夜も気づいたら寝てしまう。けれども、私はその疲労でさえ嬉しい。これまで個人競技ばかりやっていた私にとって、ダンス部の活動はとても新鮮だった。部活に打ち込むようになったことで、生活にもメリハリがでた。

だが、文化部に入っている子たちがバイトをしていたり、勉強する余裕がたくさんあるのを見て羨ましく思う時もある。それでも、心躍るほうに飛び込もうという決断をしたことに後悔はない。

受験をするという決断もダンス部に入るという決断も、今となってはその決断に心から感謝できる。

どんな選択をしたとしても、その先きっと大変なことがある。もし違う道を選んでいたら、そう考えることもある。暗闇の中でさえ楽しめるか。それは、自分で考えた末に選んだ道かどうかだと思う。大変なとき、失敗したとき。私はそれを人のせいにしたくない。だから私は自分で道を選ぶ。

インターネットで世界中と繋がることのできるこの時代。正解ばかりが溢れている。しかしながら、選択には正解も間違いもないのではないか。

かつての賢人たちは、どういう意味であの言葉を残したのだろう。未熟な私にはまだ、社会の一員などという意識はない。彼らが考える「良い時間の使い方」「時間を大切に生きる生き方」には気づけていないだろう。

けれど、高校生になった私は思う。将来振り返ったとき、「こっちを選んでよかった」と思えるように、自分が選んだ道を後から正解にする。そんな時間の使い方を、生き方をしたい。